

三豊総合病院雑誌

Journal of Mitoyo General Hospital

Vol.38

December 2017

内 容

巻 頭 言	私にとっての三豊総合病院	豊岡 伸一	1
症 例	常染色体優性多発腎嚢胞を基礎疾患とした 血液透析患者に発生したS状結腸膀胱腫の1例	山田 大介	4
	多発肺腫瘍を伴い腹膜炎を契機に発見された 小腸GIST破裂の手術例	井野川 英利	8
	高齢frailに対しCapecitabine単独療法にて CRを得た転移性大腸癌の1例	山本 澄治	12
	染色体不均衡相互転座によりBeckwith-Wiedemann症候群様の 症状を呈した3番部分モノソミー及び11番部分トリソミーの1例	入江 加奈子	18
	弧発性片麻痺性片頭痛の6歳男児例	高橋 一平	24
	心不全症例に対する退院後訪問への取り組み	藤田 貴子	29
研 究	当院小児科におけるマイコプラズマ感染症例の検討	古田 島希江	33
	胃・十二指腸ステントの有用性についての検討	西部 志恵	41
	イリノテカン含有レジメン施行患者における UGT1A1の遺伝子多型と好中球減少発現状況の関連	片桐 将志	47
	腎センターにおける当院用シャントトラブルスコアリングと バスキュラーアクセスエコーを用いたバスキュラーアクセス管理	新谷 真史	51
	栄養管理科での食材料残量削減への取り組み	河原 由貴子	57
	小児健康教室の取り組み—第4報 ～今後において求められる可能性、地域に向けて当院ができること/役割～	二川 麻珠美	62
	当院における周術期口腔機能管理の現状	井下 祐里	69
	3D-TSE差分法における至適撮像条件の検討	住 見 輔	74
報 告	第10回三豊総合病院学会を開催して	曾我 部長徳	80
	平成28年4月熊本地震のDMAT支援活動報告	喜井 なおみ	90
CPC記録			92
診療実績及び 活動報告			99
研究教育活動			184
投稿規定			207
編集後記			208

Journal of Mitoyo General Hospital

Journal of Mitoyo General Hospital

Vol.38

December 2017

CONTENTS

Special Article	Shinichi Toyooka.....	1
Case Reports		
A Case of Vesicosigmoidal Fistula in a Hemodialysis Patient with Autosomal Dominant Polycystic Kidney Disease	Daisuke Yamada et al.	4
A Surgical Case of Ruptured Gastrointestinal Stromal Tumor of the Small Intestine Associated with Multiple Lung Tumors Related to Peritonitis	Hidetoshi Inokawa et al.	8
Complete response to capecitabine monotherapy in a frail elderly patient with metastatic colorectal cancer	Sumiharu Yamamoto et al.	12
A case of partial monosomy 3 and partial trisomy 11 exhibiting symptoms similar to Beckwith-Wiedemann syndrome due to chromosomal unbalanced reciprocal translocation	Kanako Irie et al.	18
A Six-Year-Old Boy with Sporadic Hemiplegic Migraines	Ipppei Takahashi et al.	24
Efforts to visit heart failure patients after discharge from the hospital	Takako Fujita et al.	29
Research		
Treatment of mycoplasma infection in our pediatric department	Kie Kotajima et al.	33
The effectiveness of stent for malignant gastroduodenal obstruction	Yukie Nishibe et al.	41
Relationship between Gene Polymorphism of UGT1A1 and Neutropenia in Patients Receiving an Irinotecan-containing Regimen	Masashi Katagiri et al.	47
The Management of Vascular Access Using Modified Shunt Trouble Scoring and Vascular Access Echo on Kidney Center	Masafumi Niija et al.	51
Efforts to reduce residual amounts of food ingredients in our department	Yukiko Kawahara et al.	57
Approach to childhood health classes: Fourth report Possible requirements for the future and roles we can play in the local area around our hospital	Masumi Futagawa et al.	62
Present circumstances of perioperative oral management at our hospital	Yuri Inoshita et al.	69
Study of the optimum imaging conditions in the three-dimensional-turbo spin echo technique	Kosuke Sumi et al.	74
Miscellaneous		
Organizing the 10th Hospital Scientific Meeting	Osanori Sogabe et al.	80
Support Activity of DMAT in Kumamoto Earthquake	Naomi Kii et al.	90
Report of CPC		92

私にとっての三豊総合病院

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
呼吸器・乳腺内分泌外科学 教授

豊岡伸一

三豊総合病院の関係者の皆様におかれましては益々のご健勝のこととお喜び申し上げます。2017年(平成29年)6月1日をもちまして、呼吸器・乳腺内分泌外科学講座(旧外科学第二講座)の教授職をお預かりすることになりました。前職として岡山大学の同じ研究科である臨床遺伝子医療学講座の教授職を2013年4月から務めておりました。

私は1994年(平成6年)に岡山大学医学部を卒業し当時の第二外科学教室に入局しました。そして初めての研修病院として1994年9月から1996年8月の2年間、三豊総合病院にお世話になったのです。私は三豊総合病院の卒業生なのです。当時は今井正信先生が院長でした。三豊総合病院にとって今井先生は偉大な功労者であったことは、私自身が大学時代、今井先生と同じ軟式庭球部ということもあり、当時から伺っておりました。また、外科には副院長の大屋崇先生、外科部長として白川和豊先生がメスを振るっておられました。その他、スタッフとして水田稔先生、前田宏也先生、曾我部長徳先生がおられ、まさに当時から現在まで三豊総合病院の外科を背負ってこられた先生方に、外科のイロハについて熱心に教えていただきました。様々な場面の記憶が今でも鮮明に残っております。医師になりたての大切な時期に、三豊総合病院にお世話になったことが、その後の私に大きな影響を及ぼしていることは間違いありません。その中で、この三豊総合病院雑誌にも症例報告を掲載していただけており、当時とほとんど同じ外装の本雑誌を大変懐かしく思うとともに、巻頭言として、再度、紙面に登場させていただいたことに感謝いたします。

1994年の夏、三豊総合病院に岡山から初めて挨拶に伺ったときに最も印象的だったのが、三豊に向かう道中から三豊にかけての青い海でした(偶然ながらまさに2017年8月5日の今日、本寄稿文を三豊に向かう「しおかぜ」の車中で執筆しております)。青い海に白亜の病院というのが私の三豊総合病院に対する第一印象でした。また、当時は増設された手術室と旧来の手術室をつなぐ部分に窓があったのですが、そこからちょっとだけ見える豊浜の海を見るのが手術室に入った時のいわば私のルーティンになっておりました。実は、1996年に離任式を開いていただいたときも、集まっていた職員の前で、「青い海」の話を見せていただいたことを覚えております。三豊総合病院では大変豊富な定期的手術のほかに、緊急手術も大変多くございました。私はできるだけ緊急手術に携われるように、なるべく病院の外科当直をさせていただきます。今から思えば、若輩者が地域の基幹病院の当直を行っていたわけですが、特に事故などなかったのは様々な診療科の先生方や、看護師の方、検査技師の方などのメディカルスタッフのお陰と今になってしみじみ思います。これらの経験もまた、医師として大きな財産になっています。

現在、地域医療を取り巻く環境は、私がお世話になった1994年当時とはずいぶん異なっていることと思います。それぞれの時代にそれぞれの課題があることは世の常ですが、三豊総合病院は先人たちが各時代に様々な試行錯誤を行いながら、現在まで脈々と地域医療の核として発展してきた病院だと思います。そして、同時に学問的な活動の重要さも認識され、この三豊総合病院雑誌を通じて世の中に発信されてきました。このことは皆様の意識の高さを示しており、本当に頭が下がる思いです。今後とも是非、継続していただきたいと思います。

最後に三豊総合病院と関係者の皆様、そして本雑誌のご発展をお祈り申し上げ、巻頭言とさせていただきます。